

一

次の文章を読んで、後の問い(問1～12)に答えよ。(配点 50)

甲

医学部で睡眠障害についての講義が終わると、学生から「睡眠とは結局、何なのですか」と質問を受ける。「睡眠にどんな意味があるのか」「どうしたら眠らないで生活できるか」ということもよく尋ねられる。もっと切実に、「試験前に徹夜をする方法について教えてくれないか」と請われる。どれも素朴な疑問だ。関連する事実については、いくらでも述べることができる。しかし、正面から答えるのは難しい。正解はいずれも「現時点ではわからない」になってしまう。

約二〇年前、本格的に睡眠研究を始めたころは、「睡眠はレム睡眠とノンレム睡眠からなる」と答えていた。しかし、これでは本当の答えにはなっていない。なぜなら、そうであればレム睡眠とは何なのか、あるいはノンレム睡眠とは何なのかという次の疑問に答えなければならなくなる。ノンレム睡眠は特徴ある脳波を示し、レム睡眠は眼球が活発に動き、脳波はまどろんだ程度の状態が続く……。こうして微視的な方向に向かって考えていくと、自分で答えながら、睡眠とは何かという本質からますます外れていくのを感じる。だから、睡眠がなくなるとどうなるかについて考えることを出発点にする。睡眠がなくなることによって、睡眠の意味が少しはつきり見えてくるように思うからだ。

内なる自然に対する人間の挑戦

シカゴ大学のナサニエル・クレイトマン博士は、一九三九年に睡眠科学の古典ともいわれる『睡眠と覚醒』を書いた。その後、一九五三年にヒトのレム睡眠を発見するなど輝かしいコウケンをし、六三年には同書の改訂版を出版した。ここには、彼の考えた将来取り組むべき学問のヒントが示されている。体内時計による睡眠と覚醒のリズム、眠くなる仕組み、夢の神経機構など現在研究のターゲットとなっているポイントがモウラされ、多くの読者に問題を提起し、科学の夢を与え、実際に至る研究へと導かせた。

この本で、クレイトマン博士は、睡眠と覚醒の機構が科学的に明らかにされた未来では、科学により睡眠と覚醒を自由自在にコントロールできるといふ夢を述べている。未来の人たちは、科学の力で覚醒度を高めて効率よく仕事し、睡眠を自在にコントロールして短くても休息に満ちた睡眠をとるようになる。そして、長いヨカ時間を利用し、より豊かで潤いある幸せな世界を実現できるだろうと書いた。

一九六〇年代は、睡眠という内なる自然に対する挑戦が盛んに行われた時代だ。米国では何時間眠らずにいられるかというイベントがしばしば行われた。オリンピックで競われる記録のように、若者が生物としての人間の限界に挑戦した。睡眠に関する科学的知識が乏しかったためできたのだと思う。人間の能力の限界に対する挑戦は科学により助けられ、そしていつか私たちはそれを克服できる、そのような時代の空気があったためかもしれない。

私たちは、毎晩眠る直前まで活発に過ごしてぐっすり眠り、朝はすっきり目覚めると同時にしっかり活動できるというのが理想と考えがちだ。こうしたら確かに時間が有効に使えると思う。しかし、スイッチを入れるように急に活動から睡眠に入り、急に目覚めて活動するというのは生物の身

体の仕組みから考えると難しい。私たち生物の身体は機械とは違うのだ。

スケジュールに合わせて熟睡しようという試みは、大方失敗する。誰もがみなこうした経験があると思う。私自身も期末試験の時などによくやったものだ。帰宅すると徹夜に備えて眠っておこうとした。しかし、なかなか寝つけない。ぼおつとしているうちにぐっすりとは眠らずに時間がたつてしまい、さらに頭もすっきりしない。こんな状態で夜になってきて、起きて勉強しても、普段眠る時刻になると、眠たくなってきて、結局準備ができずに眠ってしまう。そして、昼間のうちに勉強していたほうがよっぽどよかったとコウカイする。

自分の都合や意志で徹夜をする、^cこうした睡眠との闘いは、生物として私たちの祖先が生きたためにカクトクしてきた調節機構との闘いということができる。私たちには、睡眠の欠乏を補う機能があり、眠りたくないと思っても、眠ってしまう。これは **ア**。もし意志の力があまりに強くて自在に徹夜を続けることができたとしたら、身体も心もまいってしまうし、生命への危機を招く。

乙

人間の叡智^{えいち}をもって克服しようとした睡眠は、起きている時の人間に特有な高次の脳機能や豊かな感情と違って、^d他の生物と共通の仕組みで制御されている。眠っている時には、私たちは人間でなく霊長目に属するただの哺乳類になる。人間に特有の高度な判断能力や複雑な心の働きを考えずに、哺乳類の一種という視点で研究を進めることが睡眠研究の前提となる。

およそ数億年前から地球上の環境が生物の繁栄に好ましいもの^(注)に変わってきた。植物が繁殖し、食物が豊富になった。こうした中で、セキツイ動物の中から恐竜や鳥類、哺乳類といった恒温動物が出現した。恒温動物は、それまで繁殖していた魚類、両生類、爬虫類^{はちゅうるい}と異なり、エネルギーを燃やし続けることで常に体内の温度を一定に保っている。外気温が低くなると活動ができなくなる。変温動物と比べて、身体の内環境を自ら一定のレンジに保つことのできる恒温動物では、

イ

。反面、体温を保つために常にエネルギーを燃やし続けなければならず、変温動物と比べると大量の食物が必要となった。そのため、食物の欠乏にはひどく弱い。

鳥類や哺乳類のような恒温動物は、さらに内外からの情報を処理し、身体をよりうまく働かせるための大脳を発達させた。大脳の発達によって適応力は飛躍的に高くなった。その頂点にいるのが人間である。しかし、これらの高等動物で発達した大脳は、体温を一定に保つ恒温動物としての限界をさらに超えて、膨大なエネルギーを消費する。そして、活性酸素のような有害な^eロウハイブツも産生するし、機能変調が起りやすいという脆弱^{ぜいじやく}性を持つ。長時間働かせていると身体が供給できるエネルギー量では足りなくなる。これを防ぎ、大脳をうまく働かせるために休息を上手に管理する技術が不可欠になった。これが睡眠であり、身体が休む時間帯に大脳をうまく鎮静化して休息・回復させ、必要な時に高い機能状態の覚醒を保証する機能を持つに至った。つまり、高等な哺乳類にとって、睡眠とは、身体が休む時に、脳の活動をしっかり低下させ休養させるシステムなのだ。

シンプルな脳と身体を休めるシステム

このシステムは実は意外に^Eシンプルな仕組みでできている。体内の温度を積極的に下げること、まるで変温動物のようになって脳と身体をしっかり休息させるのだ。皮膚から熱を積極的に逃がすシステムが働くと、身体の内部の温度が下がると同時に、頭の内部にある脳の温度が下がっていく。体内の温度が下がると、生命を支えている体内の化学反応が不活性化する。つまり代謝が下がり、休息状態になる。

人間は手先や足先から熱を逃がすシステムが作動すると、体内の温度、そして脳の温度が下がり始めだんだんと眠くなるのが一九九九年に明らかにされた。赤ちゃんの手が温かくなるのは眠たいサインだとよくいわれるが、これは生理学的にも正しい。熱を逃がして脳の温度を下げ、眠気を誘って脳を休ませているのだ。大人も同様に、夜になると自然に眠たくなるのはこうした機構が働いているからだ。冷え性で手が冷たくなりやすい人は、ウということがわかった。熱を逃がす時に重要な働きをするのは、手背(手の甲)、足背(足の甲)、太ももの内側などである。こうした皮膚部分はラジエーターの役割をしているとも考えられる。

一日の中の眠気の変動は体内の温度と連動している。徹夜で帰宅した後、昼間に眠ろうとしてもぐっすりとは眠れないのは、昼間なので体内の温度が上昇したままの状態だからだ。時差ぼけでなかなか眠れないのも同じ理由だ。時差地域で昼間に眠たくなるのは体温が下がっている時にあたるからだ。恒温動物となつて、大脳が発達するにしたがつて睡眠が発達してきたことから考えると、活動のために体内温度を保つて生活する動物が体内の温度を下げ、脳の温度も下げ、これを強制的に休ませることに睡眠の意義があると考えていいだろう。

内山真「睡眠のはなし 快眠のためのヒント」(中央公論新社 2014年)

(注) 恐竜：一九七〇年代にアメリカの古生物学者であるジョン・オストロムなどが、恐竜は恒温動物だったのではないかとする説を提出している。

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a ～ g のカタカナを漢字に直せ。解答は、解答用紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は ～ 。

a コウケン

b モウラ

c ヨカ

d コウカイ

e カクトク

f セキツイ

g ロウハイブツ

問2

空欄

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから

一つ選べ。解答番号は

。

- ① 心身を保護する睡眠が良質であることは仕事に影響を及ぼすからだ
- ② 社会生活を健全に送るためには良質な睡眠を守る必要があるからだ
- ③ 身体と心を守る生き物としての睡眠調節が健全に働いているからだ
- ④ 動植物の精神を守るため生物に必要な睡眠を体が欲しているからだ
- ⑤ 人々の健康を守るために生物としての睡眠欲が機能しているからだ
- ⑥ 子孫の健康を守るため生物には健全な睡眠が要求されているからだ

問3

空欄

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから

一つ選べ。解答番号は

。

- ① 環境が生物の生活形式に適応していた
- ② 環境が生物の繁殖力をより高めていた
- ③ 環境がエネルギーの消費を増加させた
- ④ 環境に対する適応力は大幅に飛躍した
- ⑤ 環境に適応した新種が誕生していった
- ⑥ 環境と生命の関係が一層強まってきた

問4 空欄

ウ

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから

一つ選べ。解答番号は 10。

- ① 熱を外に放出するので快眠となりやすい
- ② 生活環境の変化によって不眠になりやすい
- ③ 熱を体内に逃がしつづも不眠症になりやすい
- ④ 脳の温度も同時に下がるために生活しやすい
- ⑤ 睡眠薬を服用するために不眠を防止できる
- ⑥ 熱を逃がすのが下手で不眠になりやすい

問5 傍線部A「これでは本当の答えにはなっていない」の理由として最も適当なものを、次の

①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

- ① 睡眠の説明を順序立てて行う場合、レム睡眠やノンレム睡眠などの微視的な話題に終始してしまい、睡眠を考える出発点にまで言及することができないから。
- ② 哺乳類の一種という視点で研究を進めることが睡眠研究の前提であるにもかかわらず、レム睡眠・ノンレム睡眠などの睡眠の本質でないことを前提とした説明になっているから。
- ③ 睡眠の説明をする場合、レム睡眠やノンレム睡眠が何であるかなど、微視的な方向に話が進むことで、問題の本質から離れていってしまうから。
- ④ 睡眠とは何かを説明すると、微視的な方向に向かわざるを得なくなるが、それが睡眠の本質を突き詰めるための出発点であることに筆者自身が気づいたから。
- ⑤ 睡眠にはレム睡眠とノンレム睡眠以外に、脳波の状態によって区分できる状態が近年になつて発見されたこともあり、二〇年前より説明する事項が増えているから。
- ⑥ レム睡眠とノンレム睡眠は人の生活を快適にするためにあるというクレイトマン博士の説明だけでは、睡眠の本質を言い当てていないから。

問6 傍線部B「一九六〇年代は、睡眠という内なる自然に対する挑戦が盛んに行われた時代だ」と筆者が考える理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

12。

- ① オリンピックで競われる記録のように、何時間眠らずに生活できるかという挑戦は、一九六〇年代に若者の間で生物としての人間の限界を証明する試みとして流行したから。
- ② 一九六〇年代には、睡眠に関する知識が乏しかったこともあり、若者の間で人の限界に挑戦することが流行していたから。
- ③ 一九六〇年代には、睡眠に関する知識の乏しさとそれを補う科学によって人の限界をいつか克服できるといった考えがあったから。
- ④ 一九六〇年代には、人の能力の限界を探ることが行われており、その一つとして何時間起きていられるかということが盛んに行われるようになっていたから。
- ⑤ 一九六〇年代には、人々の睡眠に対する知識が乏しかったこともあり、その仕組みを解明したいという時代の要請が高まっていたから。
- ⑥ 一九六〇年代の人々は近い将来において、睡眠を人の意志で自在にコントロールできると信じており、その実現のために若者が競って睡眠時間を削るようになっていたから。

問7 傍線部C「こうした睡眠との闘い」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

13。

- ① 睡眠という心身が求めるものを、将来的に自己の意志や都合で押さえつけることができるように試みてきたこと。
- ② 自己の意志を超えたところにある睡眠を、機械の操作と同様に想像を絶する意志の力でコントロールしようと試みてきたということ。
- ③ 心身にとって必要な睡眠を、内なる自然に対する挑戦や計画的な熟睡など自分の都合や意志で思うように操作しようと試みてきたこと。
- ④ 生物としての人間が持っている、心身の機能を調節する機構を科学の力によって操作しようと試みてきたこと。
- ⑤ 睡眠は生物にとって心身を覚醒させるための機構であるにもかかわらず、人の都合によってねじ伏せようと試みてきたということ。
- ⑥ 人間の安全を守るためにあるはずの睡眠を、人の意志によって自由に調節できるように試みてきたということ。

問8 傍線部D「他の生物と共通の仕組みで制御されている」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 食物の欠乏に耐えることのできなかつた変温動物は、大脳を休息させ、活動エネルギーを体内に蓄積できるように睡眠を制御しているということ。
- ② 恒温動物の睡眠は、エネルギーを大量消費し機能変調が起りやすい大脳を、身体が休む時間帯に鎮静化させ、高機能状態の覚醒を保証する仕組みで制御されているということ。
- ③ 爬虫類と同じように哺乳類も状況に応じた生態系を維持するために、エネルギーを大量消費する大脳を睡眠時に休ませる仕組みで制御されているということ。
- ④ 哺乳類には、大脳を休息させるために睡眠という機能があり、この機能は変温動物と同様に身体の内部温度を一定の範囲に保つ仕組みによって制御されているということ。
- ⑤ 恒温動物は変温動物と同様、昼間における活動が活性化しているのは、心身が要求する睡眠を夜間に行うことによって大脳を休ませる仕組みが働いているからということ。
- ⑥ 恒温動物の睡眠には、変温動物にない大脳を休ませる目的があるために、大脳が要求するエネルギーの消費を防ぎながら体温を一定に保つように制御されているということ。

問9 傍線部E「シンプルな仕組みでできている」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 脳の活動全般を休息させるためにある睡眠は、人の手足から熱が放出され、体温がもっとも下がった直後に起こる仕組みになっているということ。
- ② 高等な哺乳類の大脳を休息させ、かつ発達させる役割を持つ睡眠は、人の活動が抑制され休息する必要に迫られた時、自然と起こる仕組みになっているということ。
- ③ 高等な哺乳類にとって身体とともに脳を休息させる睡眠は、体内の温度が下がり、体内の化学反応が不活性化することによって起こる仕組みであるということ。
- ④ 変温動物と異なる哺乳類は昼間に活動するエネルギーを体内に蓄積するために睡眠をとるが、これは身体の代謝が極度に低下している状態の時に起こるということ。
- ⑤ 高等な哺乳類が休息している時に大脳の活動を活性化させる睡眠は、体内の温度を下げ、代謝を強制的に不活性化させることによって起こるということ。
- ⑥ 高等な哺乳類が脳の活動を不活性化させるためにある睡眠は、身体の代謝が下がった状態が継続し、かつ哺乳類が休息を意識することによって起こるということ。

問10 空欄

甲

から一つ選べ。解答番号は 16 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち

- ① 睡眠が影響する生活への道
- ② 医学生からの質問への回答
- ③ 睡眠と日常生活のありかた
- ④ 何が睡眠であるかを明確に
- ⑤ 正解が出せない素朴な疑問
- ⑥ レム睡眠とノンレム睡眠と
- ⑦ 深い眠りとは何かを考える
- ⑧ 浅い睡眠とレム睡眠の関係

問11 空欄

乙

から一つ選べ。解答番号は 17 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち

- ① 哺乳類の一種として
- ② 脳の情報処理能力
- ③ 変温動物と恒温動物
- ④ 爬虫類と異なる睡眠
- ⑤ 社会活動と睡眠状態
- ⑥ 睡眠をひもとく大脳
- ⑦ 睡眠活動を妨害する
- ⑧ 脳活動の休息と変調

問12

本文の内容に合致するものを、次の①～⑧のうちから二つ、選べ。ただし、二つとも正解しなければ点を与えない。解答の順序は問わない。解答番号は

18

19

。

- ① 睡眠障害に関連した内容を医学部生に講義すると、彼らから「睡眠にどんな意味があるのか」「どうしたら眠らないで生活できるか」という質問が必ずといってよいほど出てくるが、これらの質問内容はおよそ三〇年前から変化はない。
- ② シカゴ大学のナサニエル・クレイトマン博士は、著書『睡眠と覚醒』の中でレム睡眠の仕組みを解明し、さらに同書の改訂版では将来の研究者が積極的に取り組むべき質問のヒントを多数示した。
- ③ 私たちは、毎晩眠る直前まで活発に過ごした後にくぐすり眠り、朝はすっきり目覚めると同時に働くことを理想としているが、このことは科学によって睡眠を支配した未来であっても生物の身体の仕組みから考えると難しいと考えられている。
- ④ 自分の都合や意志で徹夜をするなどの内なる自然との闘いは、生物としてのヒトが生きるために必要としてきた調節機構との闘いともいえるが、その闘いの中で実際にヒトの意志があまりにも強い場合、心身ともに疲弊し生命の危機を招く。
- ⑤ 人間が知恵と技術で克服した睡眠は、実際のところ人間に特有な高次の脳機能や豊かな感情によって支配されていることから、そのような機能・感情を持たない恒温動物・変温動物に関わる睡眠研究を行うことはできない。
- ⑥ 『睡眠と覚醒』においてクレイトマン博士は、睡眠と覚醒の機構が科学的に明らかにされた未来では、科学により睡眠と覚醒を自由自在にコントロールできるということを述べ、未来人たちは、睡眠が短くても休息に満ちた生活になると記している。
- ⑦ およそ数億年前から地球上の食物が豊富になる中で、下等な動物の中から恐竜や鳥類、哺乳類といった恒温動物が出現したが、恒温動物はエネルギーを燃やし続けることで常に体内の温度を一定に保つ必要があったために、地球上の食料不足を招くことになった。
- ⑧ 赤ちゃんの手が温かくなるのは眠たいサインだとよくいわれるが、これは熱を逃がして脳の温度を下げ、眠気を誘って脳を休ませる機構が体内で働いているからであり、このことは一九九九年に明らかにされた。

物をつくることはたしかに上手だ。しかし、「精神文明」のほうはうまくゆかない。民主主義は政治の上ではもちろん、社会的に見ても確実に根づいたとしても、順調に成長しているともいえないようである。ただ、物欲のなさという点は変わった。物質に対するあこがれは強くなった。それよりはるかに変わったのは執着心だろう。災難を受けても平気だというふうはまったくなくなった。それどころか、ちょっとした不幸にでも、ひどい目に会ったと泣きわめき、意気沮喪そそぐしてしまう度合いは、ベルツ博士がなげいたドイツ人などより、かえってはるかに強くなってしまったようである。これは一体どういふことなのだろうか。

生活への反省

徳川時代の士族層は、その家族をふくめると、実に膨大な数にのぼる。幕末に日本にやって来た外人たちは、この自分はまったく何も生産せず、統治の責任もたぬ寄生支配階級の数の多さに驚いた。ノーマンはその著『日本における近代国家の成立』の中で、日本の支配者、武士の総人口に対する比率は、五〜六パーセントにのぼる。僧侶や神官を入れたらもっと多くなるだろう。フランス革命当時のフランスの支配者のパーセンテージである〇・五〜〇・六とくらべると実に十倍も多い、と計算している。フランス革命は、この「わずかな支配者」の重さに耐えかねて爆発したのだが、日本の農民などが、どうしてこれほどの支配者を背負うことができたのかまったく不思議だ、というわけである。

日本の土地が豊かで、穀物生産力がヨーロッパにくらべて、たいへん大きかったせいだともいえよう。日本の農民は辛抱強かったともいえよう。それにしてもこう多くては、支配者たち、つまり武士はとても贅沢ぜいたくはできなかつた。大殿様だつて、ゴウカdな生活とはいふものの、フランス革命前の貴族たちの生活とくらべると、その物質的豊かさはたががしたものである。化粧品だろうが、装飾品、衣類だろうが、今日の一般のオフィスガールの程度(注)のものをもった奥方やお姫様は、数えるほどの少数しかいなかっただろう。贅沢ぜいたくだつたのは人づかいのあらさと、家屋敷の、あまり住むには快適でなかつた空間のひろさだけのことである。支配階級のもつ物質的富は、生活を豊かに、快適にすることに關しては、ほとんど言うに足りなかつたといえよう。伝えられる商人の贅沢ぜいたくだつてしれたものである。日本人は物質に対する執着心がなかつたのではない。物欲に乏しく、恬淡てんたんだつたのではない。そういう心をかきたてるほどの物質がなかつたのだ。もつとはつきりいうと、そういうものへのあこがれをかきおこす見本が自分たちのまわりに容易に見つからなかつただけのことなのである。

幕末、明治初めのころの日本は、^Eいわば総貧乏だつた。ちょうど大戦末期のようなもの。空襲を受けて焼けだされても、だれもそう惜しいとは思わなかつた。戦意旺盛で気持が高ぶっていたといえない。自棄やけだつたことはたしかだが、それだけでもない。よい着物をもつていても着られなかつた。そんなものを喜べる時代が間もなくやってくるなど想像もできない時代だつた。維新前後は同じ意味で豊かな物質文化の見本が未だ存在していなかつた時だつた。ということのほうが大きい理由であらう。

だからこそ、物質生活が豊かになり、豊かで快適な生活の見本が、ちかくにいくらでも展開されるようになる、欲望もせきをきつたようにあふれだし、執着度もおそろしく強くなることとなつ

たのである。明治末からはそういう時代だ。もつとも、執着が強く、災害に弱くなったことが目立ち始めるのは、とくにこの敗戦後の話である。明治大正期は物欲も名譽心も強く、立身出世主義がしきりに叫ばれたが、また災難に会っても精神の打撃は少なく、自力的な回復力は旺盛だった。泣き叫び、同情と援助に依存するのはもちろん、それを強制するようになったのはごく最近のことだ。民主主義教育というより、意志の鍛練や肉体の訓練を封建的として極力排除してきた戦後教育の「効果」が現れてきたといえよう。

甲

だが、そのことよりも、私は、日本人の物質に対する欲望、豊かな生活を求める心に、いま一つ根本的に足りないところがあるのを、より強く感ぜざるを得ない。物欲は決して排撃すべきものではない。みんなが欲望のない聖人君主になってしまったら、社会の発展は停頓するどころか、社会そのものが崩壊してしまう。禁欲主義を説く坊主や説教者は、そういう欲求は決してなくならないものだからこそ、安心して物欲を捨てると説くことができるのである。つまり、より豊かに生きようと働く人びとの社会を地盤にしてこそ、自分は働かないで欲望を排するという演説をやつて生計をかせぐことができるのだ。欲望は当然のことだ。ただそれを正しい——といつても

I

的に正しいというのではなく——社会的に健康な方向へたえず舵をとってゆく必要がある。日本人の物欲には、その「正しさ」で欠ける点がある。それは物資の蓄積、財の伝承ということに対する観念の稀薄さである。日本人の古文化財を守るといふ気持のなさは、よく指摘されるところだ。公共財産に対する尊重心もおそろしく小さい。

だが、人があまり気づかぬ根本的な欠陥は、物資を蓄積し、それを子孫に伝えてゆくという観念がないことである。「子孫のため美田を買わず」は今日でも美談である。それも一つの立場だ。だが美田のような、直接の生産財ではなく、といつて現金でもなく、フソの愛した家、家具、道具、美術品、そういうものを大切にもちつづけている日本人のなんと少ないことか。第一、伝え得るほどのものを、骨董品以外にはほとんどもっていないということが、日本人の大部分であろう。個人や個々の家にそういう伝承物がないことは、公共的なものにも伝承物が乏しいということになる。わずかに伝えているのは寺院だけである。古都京都といつても、寺院以外に何が残っているか。寺院だけに残るものがあるというのは、ヨーロッパではみながおそろしく貧しかった中世の昔のことである。このことは、日本の固有文化が、少しも伝承されないということの基本的原因なのだ。物質的基盤がなくて、精神だけが伝承されるものでは決してないからである。それは伝承するに足るものを日本人はそれほどつくり得なかつたということでもある。現在でもそうだ。絵でも彫刻でも建築でも、私たちは三百年のうちに誇り得るものを一体つくり出しているだろうか。

ヨーロッパは、この点^Hが日本とちがう。たとえば、ここでは花嫁衣裳が伝承される。おばあさんの、そのまたおばあさんのときから何度も着たという花嫁衣裳が、最も縁起がよく貴重なものである。指輪もそうだ。家具もそうだ。実用品でも、美術品に近くなるほどそういう傾向が強まる。このような感覚の上に、ヨーロッパの古い文化伝統がどっしりと根をおろしているのである。

お父さんは古い——というふうには、古いという言葉が、悪い、だめになったということと

II

語であるのは、日本だけである。古いということはいいということなのだ。この意味

が言葉ではわかっても実感としてわからぬというかたは、ウイスキーのオールドという言葉を考えていただきたい。

精神主義偏重の愚かさ

このようになった根本原因は、どう考えても家屋の構造にある。私たちはヨーロッパの観念を受け売りして家屋を不動産に入れている。だが、日本の家屋は、とうてい不動産といえるものではない。移動しにくいということはあるが、ちよつとの時間の間に出現し、消滅するという点では、日本の家はとうてい不動産の概念にあてはまりにくい。ヨーロッパでは、家屋をたてる時、それは永久の住居であり、集合所であり、生産場であるという意識を強くもつ。自分だけではなく、子孫にとつても、あるいは他人にとつても、そういうものだと思える。注文主も設計者も施工者もそう思う。その結果、事実できたものがそうなる。それに家屋を建てるとともに、一つの後代に残る現代の文化をつくったという気持もある。それは富の差でなく心構えの差なのだ。

このような「永久の家屋」とともに「永久の品物」が残るといふ感覚が生まれるから、それが根底となつて、何をつくる場合でも、その心構えになることになろう。物質をつくる時だけでない。小説を書く。論文を書く。さらには演説をする。些細な行動の例をあげれば、手紙を書くというときでさえ、ヨーロッパ人は日本人にくらべては、時の長さという重みをはるかに強く感じなければならぬはずである。私たちはヨーロッパへ行つたとき、何とかからは鈍重だと感じるものだけだ、それはヨーロッパ人が時の重さを感じながら動いているということでもあるのだ。私たちは、自分の家を建てるときでも、かりそめの住居としか考えない。木造の家屋ではそうとしか思えない、ともいえる。すぐ焼ける。すぐ腐る。つかの間の仮泊所でしかないわけだ。

會田雄次「日本の風土と文化」(角川書店 1980年)

(注) オフィスガール：会社や官公庁で働く女性事務員。

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。なお、現在から見れば不適切な表現が本文中に使用されているが、原文のままとした。

問1 傍線部 a ～ f のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。解答は解答用紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は 20 ～ 25。

a ショウド

20

b コンク

21

c サンサンゴゴ

22

d ゴウカ

23

e 停頓

24

f フソ

25

問2

空欄

I

・

II

それぞれ一つ選べ。空欄 I の解答番号は 26、空欄 II の解答番号は 27。

① 正義

② 定義

③ 多義

④ 疑義

⑤ 異義

⑥ 二義

⑦ 意義

⑧ 同義

⑨ 道義

問3

傍線部 A 「肝をつぶした」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 28。

① 大火で多くの物を失うことになったにもかかわらず、日本人が幽霊のように感じられてゾッとしたから。

② 大火で多くの物を失うことになったにもかかわらず、日本人が復興に向けた作業にいち早く取り組んでいたから。

③ 大火で多くの物を失うことになったにもかかわらず、日本人が災禍に悲嘆することなく平然とした様子で振る舞っていたから。

④ 大火で多くの物を失うことになったにもかかわらず、日本人が無欲恬淡にしており、日本との貿易の難しさを感じたから。

⑤ 大火で多くの物を失うことになったにもかかわらず、日本人が災害の後始末に対して消極的であることにゾッとしたから。

⑥ 大火で多くの物を失うことになったにもかかわらず、日本人が互いに協力することなくばらばらに作業をしていたから。

問4 傍線部B「いわゆる上から資本主義の建設に力をそそいだ」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 29。

- ① 日本人は合理的な近代社会を運営していく能力が乏しかったため、明治政府自らが資本蓄積や興業を遂行する必要があったから。
- ② 日本人は物質に対する執着がなく、資本を蓄積していく能力を欠いていたため、明治政府が産業の振興や資本蓄積の支援をする必要があったから。
- ③ 日本人は競争意欲を欠き、生産技術に関する十分な知識を欠いていたため、明治政府が技術指導を行い産業の育成を図る必要があったから。
- ④ 日本人は物質に対する執着心が乏しく、資本主義経済の構築を嫌ったため、明治政府が強制的に資本蓄積や興業を遂行する必要があったから。
- ⑤ 日本人は自由競争の概念になじめず、生産技術を発揮することに躊躇ちゅうちよしたため、明治政府が技術を発揮する社会の構築につとめねばならなかったから。
- ⑥ 日本人は宵越しの金をもつことをいさぎよしとしない性格であったため、明治政府が資本蓄積のための環境整備をする必要があったから。

問5 傍線部C「この二人の指摘」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 30。

- ① 日本人は物質に対する執着があまりなく精神文化の程度は高いが、物質文化は劣っているという指摘。
- ② 日本人は高い精神文化を築くだけの卓越した生産技術をもっているが、物質に対する執着が妨げになっているという指摘。
- ③ 日本人は合理的な近代社会を運営する能力に乏しいため、政府が富国強兵策を強行していく必要があるという指摘。
- ④ 日本人は物をつくることは上手であるが、宵越しの金をもつことをいさぎよしとしないくらい精神的には幼いという指摘。
- ⑤ 日本人は卓越した生産技術をもっているが、物質に対する執着がなく精神文化の程度は低いという指摘。
- ⑥ 日本人は物質文化の程度については高いが、民主主義を育てていくだけの卓越した生産技術をもっていないという指摘。

問6 傍線部D「それよりはるかに変わったのは執着心だろう」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 31。

- ① 物質に対するあこがれが強くなっていくなかで、このあこがれをかきおこすだけの見本が見つからなくなっていたから。
- ② 物質生活が豊かになっていくなかで、災難を受けても平気だと思えるような無欲恬淡な生き方を見失ってしまったから。
- ③ 物質に対する執着心をかきたてるほどの物質がなかったなかで、経済の発展により物質生活が豊かになったことの反動が起きたから。
- ④ 豊かな土地を背景に穀物生産力が大きくなっていくなかで、支配階級のもつ物質的富を支えていくことに耐えられなくなったから。
- ⑤ 戦後教育が進むなかで、意志の鍛練や肉体の訓練を封建的という理由により極力しりぞけてきた影響が現れてきたから。
- ⑥ 物質に対する執着が乏しかったなかで、自然災害や大戦による打撃を大きく受けたことにより物質へのあこがれが一気に生まれたから。

問7 傍線部E「いわば総貧乏だった」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 32。

- ① 貧しい生活を送る農民ばかりであったということ。
- ② 武士の家屋敷は広いだけで物質的には貧しかったということ。
- ③ 支配階級も被支配階級も物質生活が貧しかったということ。
- ④ 農民も武士も精神的に豊かな生活を送る見本がなかったということ。
- ⑤ 農民も武士もともに精神的に貧しかったということ。
- ⑥ 豊かな物質生活の見本が武士にしかなかったということ。

問8 傍線部F「いま一つ根本的に足りないところ」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① 物資を蓄積して子孫に伝えていくという観念
- ② 物欲を社会的に健康な方向へ舵取りする精神
- ③ 禁欲主義を説くことの白々しさを感じる達観
- ④ 物質に対する欲望をいさぎよく放棄する悟り
- ⑤ 公共財産を大切に守っていくとする道徳心
- ⑥ 社会の発展を停顿させずに持続させる積極性

問9 傍線部G「物欲は決して排撃すべきものではない」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

- ① 物欲そのものを退けてしまうと、公共財産に対する尊重心も失われるから。
- ② 物欲を排除してしまうと、禁欲主義を説く者達の存在価値がなくなるから。
- ③ 物欲を排除しなくても、物質的に豊かになれば物欲は自然になくなるから。
- ④ 物欲を抑えてしまうと、働こうとしない者が増えてしまうことになるから。
- ⑤ 物欲を排撃してしまうと、社会的に正しい方向に進む機会が失われるから。
- ⑥ 物欲そのものがなくなってしまうと、社会の崩壊をまねくことになるから。

問10 傍線部H「この点」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 35。

- ① 古い文化伝統の上に伝承を尊ぶ心が根をおろしている点
- ② 物質的な基盤そのものよりも精神の豊かさを重んじる点
- ③ 物質に対する欲望の裏返しが公共財産の尊重心である点
- ④ 伝承に値するものをつくり出して今日まで伝えている点
- ⑤ 古いという言葉を豊かであるという意味で使っている点
- ⑥ 古いという言葉をよくはなないという意味で使っている点

問11 傍線部I「このようになった」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 36。

- ① 日本人は今日まで物質への欲望を根本的に欠いてしまい、精神主義に偏重してしまったとこうのこと。
- ② 日本人は家具や道具、美術品、骨董品などを蓄積して子孫に伝えていこうとしなかったとこうのこと。
- ③ 日本人は物資の蓄積に励むだけで、日本独自の文化を全く残していこうとはしなかったとこうのこと。
- ④ 日本人は精神だけを伝承して、古い文化伝統の上にとっしりと根をおろすことなくきたとこうのこと。
- ⑤ 日本人は絵や彫刻、寺院などの建築物を大切にせず、後世に十分伝承していかなかったとこうのこと。
- ⑥ 日本人は物資の蓄積や財の伝承に対する観念が薄く、固有文化を伝承していかなかったとこうのこと。

問12 傍線部J「ヨーロッパ人が時の重さを感じながら動いているということ」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 37。

- ① ヨーロッパ人は後代に残る文化をつくるという心構えをもって、生産活動や執筆活動をしているということ。
- ② ヨーロッパ人は家屋の建設の際に自分だけではなく子孫や他人にとっても美術品に足るものであるかを意識するということ。
- ③ ヨーロッパ人は手紙を書くときでさえ、時間をむだにしないようにすることを心がけているということ。
- ④ ヨーロッパ人は鈍重に動くことの大切さを感じながら、家屋の建設や論文の執筆などに当たっているということ。
- ⑤ ヨーロッパ人は自分の行動の意味を永久という時間軸に照らして問いながら、さまざまな活動をしているということ。
- ⑥ ヨーロッパ人は「永久の品物」を残すという感覚にしたがって、「永久の家屋」を注文し、設計・施工しているということ。

問13

空欄

甲

38

から一つ選べ。解答番号は 38。

- ① 物質的基盤と精神偏重
- ② 物資の蓄積と公共財産
- ③ 古文化財に対する尊重
- ④ 物資の蓄積を欠く観念
- ⑤ 文化伝統を守る日本人
- ⑥ 古いという言葉の意味
- ⑦ 欲しい固有文化の伝承
- ⑧ 日本人に欠落する物欲

問14

本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから二つ、選べ。ただし、二つとも正解しなければ点を与えない。解答の順序は問わない。解答番号は

39

40

- ① 幕末、明治初めのころの日本は、豊かな物質文化の見本が未だ存在していなかったため、空襲を受けて焼けだされたにもかかわらず、そのことを惜しいと思う者はだれもおらず、災難を受けても精神の打撃は少なかった。
- ② 日本では「お父さんは古い」というような使われ方をしているが、もともと日本語の「古い」という言葉には「よい」という意味が込められており、そのことはウイスキーのオールドという言葉を考えれば容易に実感できるはずである。
- ③ 農民人口に対して五～六%の比率にのぼる徳川時代の武士を日本の農民が背負うことができた理由としては、日本の土地が豊かで穀物生産力がヨーロッパよりも高かったことや日本の農民が辛抱強かったことが挙げられる。
- ④ ヨーロッパではおばあさんの、そのまたおばあさんの花嫁衣裳が最も縁起がよく貴重なものとして子孫に伝承されていくが、花嫁衣裳だけでなく指輪や家具も同じように伝承されており、いずれも美術品として扱われる傾向が強まっていく。
- ⑤ 有名なドイツ人の医学者ベルツ博士は明治九年十一月に東京で起きた大火の焼け跡を視察した際、日本人が意気阻喪していない様子に驚いたが、ベルツ博士はそこに日本の精神文化の低さと物質文化の程度の高さを見いだした。
- ⑥ みんなが欲望のない聖人君主になってしまふようなことは起こりえないと信じているがゆえに安心して禁欲主義を説く坊主や聖職者は、自らは働いていないにもかかわらず、欲望を排すべきだという演説を無責任にも行っている。
- ⑦ ヨーロッパでは自分だけでなく子孫や他人にとっても家屋は永久の住居であり集合所や生産場であるという強い意識のもとで家屋をたてるが、日本では家屋をかりそめの住居としか考えずにたてており、その意味では日本の家屋は不動産とはいえないものである。
- ⑧ 幕末・明治期日本の卓越した観察者であったドイツの医学者ベルツ博士とイギリスのオルコック公使が示した客観的な意見の重要性に気づいた明治政府は、富国強兵策を強行し、国家が強力に資本家を援助するいわゆる上から資本主義の建設に注力した。
- ⑨ 「子孫のため美田を買わず」は今日でも美談であるが、物に対する執着心が敗戦後は一層目立つようになってくる一方で、物資を蓄積して財を子孫に伝承していくという観念は薄いままである。